

体が弱く休みがちな私を
補講で温かくフォロー

— 成蹊学園で学ばれたのは、小学校三年生からですね。

杵屋 昭和十二年生まれですから、小学校に入る頃は、戦争の真っ最中でした。当初、中野の公立小学校に入学したのですが、戦火を逃れるために、すぐに親戚を頼って鹿児島に疎開しました。ところが鹿児島も大空襲に見舞われ、埼玉に移り住みました。終戦を迎え、東京に戻り、麻布小学校に入ったのですが、成蹊小学校で編入試験が行われることを知り、小学校三年生から通うことになったのです。わずか二年間あまりで、四回も転校したことになります。



長唄杵巳流七代目家元

杵屋 巳太郎

Mitaro Kineya

2007年度、重要無形文化財（人間国宝）の認定を受けたのが、長唄杵巳流七代目家元の杵屋巳太郎さん。尾上菊五郎劇団音楽部で代表部長を務めるなど、長唄三味線の第一人者として活躍されています。伝統ある邦楽の継承・振興への意気込みと、成蹊学園時代の思い出を語っていただきました。

伝統の「保持」だけでなく
「継承」させること

それが人間国宝として与えられた
使命だと考えています

— 入学して、どのような印象を持たれましたか。

杵屋 当時、授業が行われていたのは、木造平屋建ての西校舎でした。私たちは「ウエスタン」と呼んでいました。冬はすさまじい風が吹き込んで、とても寒かったことを覚えています。まだみんなが貧しく、冬でもシャツ一枚だけの子どももいました。ちょうど野球が流行り始めた頃ですが、まともな道具は入手できず、ボールもグローブも手作りの布製でした。給食もなく、弁当持参で、石炭を炊くダラムストーブの回りに弁当箱を置く金網の棚が設けられていました。ストーブに近すぎると黒焦げになるし、遠いとちっとも保温効果がないので、けっこう置く場所には気がつかっていませんね。小学校五年生の時に、ガラス張りの明るい二階建ての新校舎ができた時は、もう夢のようでした。

— 印象に残っている先生はいらっしゃいますか。

杵屋 小学校の担任は、香取良範先生で、毎朝、ホームルームの時に、その日のニュースを生徒に発表させる指導をされていました。四〜五本の記事を読んで、準備はしておくのですが、出席番号順に指名されるので、私（本名・宮澤雅之）の番になる頃には、用意しておいたニュースは全部発表されてしまいました。仕方なく「なんにもありませんでした」と言うと、先生がジロリと睨む（笑）。それがとても怖くて、子どもなりに工夫して、相撲やプロ野球の結果など、他の友人たちがあまり興味を持たないようなニュースを発表するようにしました。この指導によって、新聞を読む習慣が身につきましたから、素晴らしい教育だったと思っています。

小学校の作業の時間を担当されていた大久保捨藏先生も印象に残っています。用具の掃除をしたり、畑の草むしりをしたりしながら、生えている植物の名前なども教えてもらいました。ある時、先生が雑草を抜いて「これはヒメジオンと言



「とおっしゃいました。その名前と、先生の髭面が妙に対比していて、その後、先生は「ヒゲジョン」というニックネームで呼ばれるようになりました(笑)。

――**中学校時代の思い出は何かですか。**
杵屋 中学校時代の私は、体が弱く、すぐに熱を出していました。気管支炎にかかり、長期欠席したこともあり。中学入学直後も休んだため、英語の最初の授業が受けられませんでした。「このままでは、他の生徒から遅れてしまう」と心配されたのでしよう。英語の羽深幸男先生が、放課後に補講をしてくださいました。その時「アルファベットを逆から言えるようにしておきなさい」と言わ

れました。当然、先生は冗談で言われたわけですが、私は生真面目にすっかり覚えていき、次の授業で発表して、先生が目を丸くされたのを覚えてます(笑)。それからも欠席がちな状態が続いたのですが、夏休みに一週間、遅れを取り戻すために、再び補講をしてくださいました。羽深先生の暖かいフォローのおかげで、英語は大好きな教科になりました。

その後、次第に体力が付き、校内大会でリレーの選手を務めるまでになりました。当時から盛んだったラグビーも好きで、高校最後の体育の授業では、「最後だから、好きなスポーツをやつていいぞ」と言われ、雪が積もっていたにも関わらず、全員がラグビーをやるうと言い出し、泥まみれになったことを覚えています。

――**美術部でキャプテンを務めアトリエが溜まり場に**

――**部活動は何をされていたのですか。**
杵屋 中学校から高校までの六年間、美術部に所属し、キャプテンを務めました。残念ながら今はなくなつてしまいましたが、アトリエが私たち美術部員の溜まり場でした。水彩を中心に、ペンテル画、エッチング、油彩にも取り組みました。加藤久幹先生の指導のもと、「大潮展」という展覧会に二十号の油絵を出品したこともあり。高井戸の風景をテーマにした作品で、東京都美術館に飾

られ、誇らしい思い出いっぱいでした。また、文化祭の際に正門の飾りつけをするのも、美術部の担当でした。グラウンド裏のモミの木枝を切り出して、正門を覆い、看板を掲げるのですが、前日は徹夜作業になり、アトリエに泊り込みました。夜中にパンを買ってみんなで食べたり、教員室に積んであった大判模造紙を持ってきて、それにくるまって寒さをしのいだことも、懐かしい思い出です。

現在でも、美術部の仲間たちとは「成蹊アーティストクラブ」(SAC)という親睦団体を結成して、交流が続いています。毎年夏、日本橋公会堂で、私の長唄の弟子たちの発表会を開催しています。そのロビーの一角で、美術部OBの小品展も行っています。「成蹊コーナー」も設けて、会話を楽しめるようにしています。

――**高校三年生で襲名披露し 三味線の稽古に没頭**

――**大学時代で印象に残っていることをお聞かせください。**
杵屋 高校二年生の時に父(六代目杵屋巳太郎氏)が亡くなり、一周忌の日に後継を継ぐことを決意しました。イイノホールで開いた襲名披露では、成蹊グリークラブが校歌を歌い、花を添えてくれました。プロとして独り立ちしなければなりませんから、その後は三世今藤長十郎師・綾子師(両者とも、後に人間国宝)

のもと、一日十時間以上、三味線の稽古に没頭しました。そのため、とくに大学三年生以降は、キャンパスに通うのは週一回、ゼミのある金曜日だけでした。友人たちからは「金曜日男」と呼ばれていたほどです。私が入ったのは佐々木昌義先生のゼミでしたが、そんな私の特殊な事情に先生も理解を示してくださいました。私の方も、遊んでいるわけではなからと、けっこう堂々としていました(笑)。

――**在学中に学園で演奏されたことはありますか。**

杵屋 高校三年生の文化祭の時、小講堂で三十分間かけて、長唄「網館の段」をお聴かせしました。羅生門で渡辺綱に右腕を切られた茨城童子という鬼人(酒呑童子の配下)が、綱の伯母に化けて、右腕を取り返しにくる有名な物語で、三人の唄と三味線を付けて、ナレーションも入れて演じました。

大学入学後も、成蹊会主催のクリスマス会で「邦楽の夕べ」が企画され、三味線を五曲弾いたことがあります。

――**現在の仕事に、成蹊学園で学ばれたことが生きていると感じられることはありますか。**

杵屋 先ほど申し上げたように、高校三年

年生で本格的な芸の道に入りましたから正直なところ、大学に進学すべきかどうか、かなり悩みました。大学に進むのなら、すでに長唄科が設置されていた東京芸術大学で、専門的に勉強した方がいいのではないかと考えました。けれども、親戚の人たちから成蹊大学への進学を強く勧められたのです。「成蹊大学の勉強は、長唄と関係ないじゃないか」と抵抗しましたが、「そうではない。成蹊大学で豊かな大学生活を送ったという経験自体が、将来、きっとプラスになる」と言われました。この説得を聞き入れて、成蹊大学に入学して良かったと、今では感謝しています。

というのも、伝統芸能の世界は、個人の力だけでは成立しません。大勢の力が結集することによって、素晴らしい舞台になります。協調精神やリーダーシップ、および数多くの人々とコミュニケーションを図ることが、とても重要になります。その素養を大学時代に身につけることができたと思います。

――**二〇〇七年度、重要無形文化財(人間国宝)の認定を受けられました。名実ともに第一人者のお立場として、今後の活動方針をお聞かせください。**

杵屋 伝統芸能の世界に生きる人間は、皆がそれぞれ、一生懸命に研究錬磨して、芸を磨いています。けれども、重要無形文化財に認定された以上、自分だけが精進していればいいというものではない。

それに加えて、立派な後継者を育成する使命が与えられたと解釈しています。もちろん、簡単なことではありません。理屈で教えようとしても無理で、まず自分でちゃんと演奏して、それに共鳴した人がこんなふうには三味線を弾きたいなと思うようにならないければ、芸を伝えることはできません。「桃李もの言わざれども、下自ずから蹊を成す」の成蹊精神に通じる場所もありますね。

――**芸を伝えるという意味では、小学校での演奏活動も長く続けていらつしゃいますね。**

杵屋 二十二歳の頃から、仲間五名ほど、各地の小学校を巡回して、子どもたちに三味線の生の音を聞いてもらう活動をしています。師匠には、まだ修行中の身なのに早いと怒られましたが、私としては、絶対に必要な活動だという強い思いがありました。

なぜなら、その当時の音楽の教科書は、日本の伝統音楽に関する記述は1ページ程度で、邦楽のレコードを聞くこともなければ、和楽器に触れる機会もないといった状況だったからです。音楽教育から完全に取り残されていたのです。

けれども、日本には伝統的な文化行事が数多く残されており、祭り囃子など、意識していなくても、日常生活の中に溶け込んでいる邦楽は確実に存在します。その魅力を日本人が見失ってしまうのは悲しいことです。もちろん、洋楽を聞い

たり、ピアノ、バレエのレッスンに通うことを否定はしません。私自身、小学生の頃には、ショパンに夢中になっていたこともあり。ただし、日本の伝統的なものにまったく興味がなく、知らないというのでは、やはり寂しいでしょう。

そこで、小学校を巡回して、子どもたちに邦楽に触れる機会を増やすことで、親しみを感じてほしいと考えたのです。それから五十年。私たちの願いが通じたのでしょうか、現在は、少しずつ音楽の授業で、三味線、琴、尺八、和太鼓など、邦楽器を取り入れるケースが増えているようです。

――**振り返るとしみじみ分かる 成蹊学園の価値**

――**最後に、成蹊学園の後輩たちに向けて、メッセージをお願いします。**

杵屋 おそらく、いま成蹊学園で学んでいる人たちは、あまりにも身近な存在すぎて、学園の価値が実感できていない面もある気がします。富士山と同じようなものです。中腹にいたら、高さは分からない。けれども、下山して、離れるほどに、とても高い山の懐に抱かれていたことが分かります。それと同じで、卒業した後、ふと振り返ると、ありがたみがしみじみと感じられます。そんな学園の魅力を、今後も大切にしていきたいと思っています。

(広報課)



七代目 杵屋 巳太郎 (ななだいめ・きねや・みたろう)

本名・宮澤雅之(みやざわ・まさゆき)。1937年、東京都生まれ。成蹊小学校、中学・高等学校を経て、成蹊大学政治経済学部卒業。1956年、18歳で七代目杵屋巳太郎を襲名し、長唄杵屋流家元を継承。1971年、尾上菊五郎劇団音楽部に入部し、現在、音楽部長・立三味線を務める。1994年、前年のリサイタルにより、芸術祭賞(文部大臣賞)を受賞。邦楽コンクール作曲第2部(三味線)で第1位に入賞するなど、作曲活動にも精力的に取り組んでいる。2007年、重要無形文化財(人間国宝)の認定を受けた。